



ロータリーは機会の扉を開く

2020~2021 RI.2760地区

瀬戸ロータリークラブ会報

2021年3月10日発行 第2785号

本日のプログラム

2021年3月10日(水)

通算第2962回例会

本年度第29回

場所:瀬戸商工会議所

例会次第

- ・開会点鐘
- ・「君が代」「奉仕の理想」
- ・出席状況
- ・会長挨拶
- ・行事
- ・誕生日・結婚記念日祝福
- ・幹事報告
- ・委員会報告/その他の報告
- ・卓話

パスト会長 勝谷 哲次君

演題…「無題」

パスト会長 井上 博君

演題…「ロータリーのことなど」



第2961回例会挨拶 会長 松村晋也君

皆さんこんにちは。本日は瀬戸ロータリークラブ第2961回の例会です。3月はRIの月間といたしまして、水と衛生月間、そして3月13日を含む1週間は世界ローターアクト週間です。今日はこの月間にちなんで水と衛生問題のお話をさせていただきます。

今世界中で日本ほど安全安心な飲み水がふんだんに手に入る国は少ないと思います。しかもその水をトイレに使ったり洗濯物に使ったりしています。2019年現在のデータですが世界で21億人の人がまだ安全な水が手に入らなく、8億4400万人の人は未だに川や池の水を飲んでいきます。これが病気や感染症の原因となっております。コレラ、赤痢、腸チフス、A型肝炎等を引き起こします。また、この水と常にリンクして言われるのがトイレの問題です。世

界の人口の8人に1人、8億4900万人の人は未だに屋外排泄が現状です。ロータリーは奉仕活動を通して水道の設置、トイレの設置等の奉仕事業を行っています。しかし我々のこのような活動も、当事者しか認知されておらず、世界中の人々にはあまり知られていません。同じような活動をしているユニセフ、WHO、NGO ウォーターエイドなどの活躍は知られております。これは投入するマンパワー、資金力の違いになると思われます。よくロータリーはPR下手、広報下手と言われます。良いことをしているのだけれど当事者しか理解されていない面が多々あると思います。かつて決議23-34の6のa)に述べられているように奉仕活動を行うに当たって、「すでに行なっている組織、団体があればそこに任せる。あるいは商工会議所のような組織の仕事を取ったり、邪魔をしてはならない」と言われておりました。なにもかにも手を広げるのではなく、取捨選択して必要なものに奉仕の手を差し伸べるようにすべきと思います。アフターコロナに備えて改めて思った次第です。

今日は水と衛生問題と今後の奉仕のあり方についてお話ししました。会長挨拶とさせていただきます。

前回例会記録

2021年3月3日 第2961回例会

WEB例会

・出席率 WEB視聴55名中38名

出席率 69.09%

・卓話 水野 和郎君

演題…「年男の卓話」

例会予定

……3月17日(水)……

澤田 武憲君

「地区大会報告」

……3月24日(水)……

休会

……3月31日(水)……

会長エレクト 鈴木 政成君

「PETS 報告」

3月3日、木曾路瀬戸店にて、米山奨学生イ・チェリムさんの

送別会が執り行われました。(写真)

感染拡大防止を心掛け広い会場での送別会でした。会長・幹事・カウンセラー・米山委員長・他、沖縄愛好会(本来3月にイ・チェリムさんと共に沖縄旅行を予定してましたが、コロナで中止になりました。その時の参加メンバー)のメンバーと、指導教員の長井先生と、イ・チェリムさんの計11名でした。

17:30 会長挨拶、イ・チェリムさん挨拶、大澤米山委員長の乾杯で始まり、和気あいの雰囲気ながら、参加者全員大声を張り上げることもなく、静かに楽しい時間を過ごしました。最後に加藤幹事の挨拶、再度大澤委員長の締めで20:00には終了となりました。来日も遅れ帰国も突然、例会出席も数回…コロナに振り回された一年でしたが、貴重な経験をさせて頂きましたと本人は大変感謝してくれました。報告をさせていただきます。青山 稔

水野 和郎君 「年男の卓話」



中学3年生の藤井聡太四段(当時)と

「年男の卓話」ということで、人生を振り返る機会をいただき、ありがとうございます。

さて、今年は丑年ですが、新型コロナウイルスによる「緊急事態宣言」などという、とんでもない年の幕開けとなりました。

私は、昭和24年5月に瀬戸市で生まれ、今年が6度目の「年男」を迎えました。丑年は十二支の2番目で、子年に蒔いた種が芽を出して成長する時期とされ、丑年には、先を急がず目の前のことを着実に進めることが将来の成功につながっていくといわれています。コロナが1日も早く収束して良い1年となることを願うばかりであります。

私は、瀬戸信用金庫に、大学卒業後の昭和47年に入庫しました。入庫後の日本経済は、昭和40年代のオイルショックや昭和60年の「プラザ合意」後の急激な円高進行により、輸出主導型で成長してきた日本経済は大きな打撃を受け、その影響はノベルティや洋食器等の輸出で栄えていた当地瀬戸にも大きな影響を及ぼしました。私は、若手・中堅職員として、困難に立ち向かう経営者の方々と日々接し、多くを学びました。

その後、「バブル経済」の発生、そして「バブル経済」の崩壊。ここから長い「バブル不況」が始まり、1990年代は「失われた10年」と言われるようになりました。バブル経済崩壊は、金融機関にとっては回収困難な巨額不良債権が発生し、多くの金融機関が破綻して金融不安が広がった時代でありました。

平成7年、私が46歳の時に支店長に就任し、以降4店舗の支店長を経験しましたが、私の支店長時代は資産価格バブル崩壊の後遺症が長引く中、不良債権問題への対応が最優先課題とされた時期に当たります。

平成18年、執行役員名古屋支店長を経て理事を拝命しました。日本経済が大きく変化する中でさまざまな経験を積み重ねてきたことから、「今後も経営環境は激変していく」と確信していました。「勉強とは縁遠かった自分に理事が務まるか」と自問自答しました。そして、「学ぶことに終わりはない」という思いに至り、57歳の時に名古屋商科大学大学院に入学しました。この2年間は仕事をしながら休む間もなく、若い人に混じって勉強しました。おかげさまで、平成20年、同大学院マネジメント研究科修士課程(MBA)を無事修了し、現在も縁あって、名古屋商科大学地域活性化研究センター特任教授の任命を受けています。

平成26年、理事長に就任し、令和2年6月から会長を務めています。私の理事長時代は、日本銀行が、平成25年に「量的・質的金融緩和」を、平成28年には「マイナス金利付き量的・質的金融緩和」を相次いで導入しました。理事長就任後、超金融緩和策・マイナス金利政策の長期化が見込まれる中で、「量的拡大」に軸足を置いた

従来の路線を見直す必要性を強く認識し、経営方針を「収益性重視」に転換しました。資産規模をコントロールしつつ、中長期的に相応な水準の収益を確保できる経営体制の構築に向けて、「収益力の強化」や「リスク管理の高度化」に取り組んでおり、その効果が徐々に現れてきたところでもあります。

令和2年12月末の業容は、預積金残高2兆1,566億円、貸出金残高1兆799億円、役員数1,279名、店舗数72店舗、全国の信用金庫254金庫中16位の規模となり、来年(令和4年)の11月には、創立80周年を迎える信用金庫となりました。

そして、昨年(令和2年)は、新型コロナウイルスの感染が拡大しました。事業者の皆さまにおかれましては、この経済環境下、非常に苦勞をされている

かと思えます。

瀬戸信用金庫は、昨年来、新型コロナウイルスの影響を受けられたお客さまへの対応を最優先に考え、円滑な資金繰りを中心とした支援と経営相談に全力で取り組んでまいりました。

令和2年12月末の新型コロナウイルス関連融資取組みの実績は、10,594件の金額1,659億円となりました。愛知県内に本店を置く第二地銀3行、信用金庫15金庫で、おそらく3番目に多く取組んでおります。

今後は、資金繰りをもとより、新たな販路の開拓、お取引先の紹介など本業支援にも力を注いでまいります。新型コロナウイルスの収束はなかなか見通せませんが、引き続き金融仲介機能の発揮により、地域経済の回復に向けて役職員一丸となって取り組んでまいります。

また、地域貢献活動にも力を注いでまいりました。理事長就任後(増岡市長時代)には、瀬戸市と緊密な関係を築いてまいりました。平成27年、三菱UFJ銀行に代わり当金庫が瀬戸市の公金を取扱う「瀬戸市指定金融機関」の指定を受けました。同年には、瀬戸市と「地域包括連携協定」を締結し、経済振興、魅力あるまちづくり、防災、環境保全など広範囲な分野で連携し瀬戸市の活性化を推進しております。

また、瀬戸市と地域経済の持続的発展を目的に、「瀬戸市産業振興連携協議会」を設置し、これまでに、「海外バイヤーマッチング」や市内の製造業など企業を紹介する「せとまち企業ガイドブック」の作成、瀬戸市と市外の製造業を繋げる「瀬戸市ビジネスマッチングセミナー」などを開催。

平成28年には、瀬戸商工会議所と連携協定を締結し、瀬戸市内の中小企業と小規模事業者の支援に連携して取り組むこととしています。具体的には、講習会の開催や景気動向の情報交換をすることで、企業の経営改善や人材育成、海外展開支援などの連携を強化しています。

平成29年には、瀬戸市や瀬戸商工会議所と連携し開催している創業塾「せと・しごと塾」が10周年を迎え、中小企業診断士の資格を持つ職員が講師を務めたり、事業の将来性を見極めたうえで「創業支援ローン」などの融資商品で資金面をサポートしてまいりました。

平成30年には、当金庫所有の「瀬戸信用金庫総合グラウンド」を瀬戸市へ貸与し市民が利用できるための基本合意書を瀬戸市と締結しました。

また、同年、瀬戸まちづくり株式会社と連携し、陶芸やガラス工芸などの若手作家の支援を通じた地域活性化事業を始めました。若手作家を講師としたものづくり体験プログラムや工房見学ツアーなどを開催しました。若手作家の活躍の場をつくり、技術の伝承と中心市街地のにぎわい創出を目指す事業を展開しております。

平成31年4月には、瀬戸市と連携して瀬戸市のイメージアップや認知度の拡大等のシティプロモーションに取り組む企業として「瀬戸市企業アンバサダー」第1号認定を受けました。

令和元年5月には、地域の文化・芸術への貢献を目的に当金庫の発祥店舗のひとつである瀬戸市内にあった旧本町支店跡に「瀬戸信用金庫アートギャラリー」を開館しました。

現在、瀬戸市は、史上最年少プロ棋士で史上最年少二冠(王位・棋聖)となった地元在住の藤井聡太二冠の活躍で大いに盛り上がりを見せていますが、私は、平成30年から「瀬戸将棋文化振興協会」の会長を務め、藤井聡太二冠の活躍を応援しており、今後のますますの飛躍を期待しています。昨年、藤井二冠の偉業を祝うとともに、新型コロナウイルスの早期収束、医療関係者への感謝を表すため、瀬戸信用金庫、瀬戸将棋文化振興協会、瀬戸商工会議所、瀬戸市が連携し、「藤井二冠お祝い花火実行委員会」を立ち上げ、10月1日に、24事業者の皆さまからの協賛を得て、花火を打ち上げました。この取り組みは、ニュース等でも取り上げられ、明るい話題として瀬戸市のシティプロモーションにも繋がりました。

私の信条は、江戸後期の儒学者 佐藤一斎のことば、「少にして学べば、壮にして為すことあり。壮にして学べば、老いて衰えず。老いて学べば死して朽ちず」であります。その意味は、「若くして学べば、成人して何事か成し遂げるであろう、壮年にして学べば、年をとっても老いない、老いて学べば死んでも、その志は受け継がれていく」であります。瀬戸で生まれ、瀬戸で育った私は、瀬戸に感謝し、その恩を返すべく、人生は一生勉強の想いで、今後も地域経済の発展に貢献してまいります。1日も早く平穏な日常が戻ることを願うばかりです。